

昭和二十三年九月 豊橋市消防署入署

昭和五十五年九月 同消防署退職

昭和五十五年十月 豊橋市ステーションビル株式

会社入社

昭和六十三年三月 同社退職

現在、(財)全抑協の理事としてご活躍しております。

賞

昭和五十九年十一月三日

勲六等单光旭日章受章

(愛知県 齋藤 高志)

私の太平洋戦争とソ連強制抑留生活

三重県 川邊 幸治

はじめに

彼岸の中日、家族と共に仏壇に向かって礼拝した。祀られているのは、私が抑留中に亡くなった両親・我が子、そして、中国で戦死した弟の霊である。仏壇の前で「もし、私が抑留されずに復員することができていたなら、両親・我が子を死なせなくて済んだらうし、再会を喜び合うことができたであろうに…」などと話し合った。父母を亡くし、弟妹四人の養育に苦労した妻の話なども出て、娘も孫も真顔で話を聞いていた。

抑留されてから既に五十九年が経ち、戦友会もいつの間にか開かれなくなり、文通していた戦友も次第に死亡したり、体調をくずしたりして連絡が取れなくなつた。加齢と共に記憶も薄れがちであるが、今まで何度も各地で要請されて抑留の話

をしたことがあるので、その時の資料をもとに記述したいと思う。抑留中の全体の動きと作業・生活に分けて紹介したい。

生い立ちから軍隊入隊まで

大正六（一九一七）年九月二十八日、松阪市で八人兄弟の長男（弟三人、妹四人）として出生した。父は教職員であった。父の転勤で津市に転居。以降、市内で三回転居した。三重師範附属小学校に入学し、昭和五（一九三〇）年附属小学校を卒業、旧制三重県立津中学校に入学した。当時の経済状態は、世界恐慌に突入しており、日本も財政が悪化し、国民生活も窮乏を告げていた。「満蒙は日本の生命線」として開拓団が満州へ進出していた。

中学二年生の時だった。昭和六年九月十八日、満州奉天市北方の南満州鉄道の柳条湖の鉄橋爆破事件があり（満州事変勃発）、その頃から学校教練も厳しくなっていた。昭和七年には上海で中国

軍と交戦（上海事変）。昭和八年三月、日本は国際連盟を脱退、時局は益々重大化していった。そういう世相の中で旧制中学を卒業した。

卒業後、国鉄の駅長をしていた叔父と従兄弟の紹介もあって国鉄職員となり、大阪鉄道局管内の四カ所の駅で勤務した。

昭和十二年七月、盧溝橋（北京の西南）で日中両軍が衝突（支那事変勃発）。八月には、日本陸隊と中国軍交戦（第二次上海事変勃発）。十二月には南京占領、提灯行列等、国民は戦時一色となっていた。そういう中で徴兵検査があり、甲種合格となった。

軍隊生活

昭和十三年一月十日、現役兵として三重県久居市にある歩兵第三十三連隊歩兵砲中隊に入営した。

昭和十四年五月、航空隊拡充のため浜松飛行第六十二戦隊（重爆隊）に転属を命ぜられ、同年十月、所沢市にある陸軍航空整備学校電気科に入校。

翌年五月、同校卒業。帯広に移駐していた原隊に復帰し、電気系統の整備、夜間飛行場照明などの作業に従事していた。

昭和十六年十一月、作戦命令により(台湾移駐)電気関係機材を梱包、列車輸送により芝浦港に至り、輸送船で出帆した。着いたところは仏領インドシナのサイゴン(当時、平和進駐の合意がなされていた)に上陸。十二月初め、カンボジアのピルサに飛行場を開設した。

十二月七日、戦隊長から作戦命令が下達され、十二月八日、米英に対する宣戦の日、戦隊はマレー半島の上陸地点コタバル海岸の爆撃のため、二十一機が離陸していった。太平洋戦争に突入した瞬間であった。

マレー作戦で多大の戦果を挙げ、次いでタイ国のバンコックのドムアン飛行場に移動、ラングーン、マンダレー攻撃などビルマ作戦に参加、さらにフィリピンのマニラ近くにあるクラクフィールド飛行場からバターン半島、コレヒドール要塞攻

略戦に参加。さらに、中国南京城外飛行場から浙漢作戦に参加した。

昭和十七年八月、機種改変(九七式爆撃機二型)のため帯広に帰還した。

機種改変の訓練中に、私と少年航空兵の軍曹二人が北千島幌筵島の飛行第五十四戦隊(隼戦闘機)に転属を命ぜられ、小樽港を出帆した。アリユースヤンから日本本土を狙うアメリカ爆撃機を要撃するのが任務である。白い飛行機雲の航跡を残しての空中戦を何度も見ることができ、撃墜され舞い落ちる敵機に拍手を送ったものである。

昭和十九年八月、戦局は悪化、北海道防衛に重点が指向され、戦隊主力は札幌丘珠飛行場に転進し、我々は、北千島派遣隊となり、占守島の片岡海軍飛行場に移駐し、本土防衛に当たった。

昭和二十年八月、ソ連軍が樺太国境を越境、南部樺太侵入の恐れありということで、北千島派遣隊の飛行機も北海道へ転進してしまい、我々地上勤務者四十五人が片岡飛行場に残留することとな

り、千島列島を管轄する第九十一師団の指揮に入ることになった。昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送があるので、下士官以上が正装して無線通信隊の兵舎に集合を命ぜられ、放送を拝聴した。北の離島のため無線のウェーブが入って、はつきりと聞くことができなかつたが、終戦となつたことが伝えられていた。整列していた誰もが首を垂れて眼に涙をしていた。放送が終わって原隊に帰り兵隊に伝達した。感涙にむせぶ者、今後に対する不安を持つ者、復員できると喜ぶ者、悲喜交々であつた。

そういう状況の中で、夕方、現地師団司令部の要請で命令受領に行った曹長からもたらされた命令は次のようであつた。

「日本国は無条件降伏を受諾し、米軍は日本本土に上陸している。しかし、我が師団の管轄する千島列島は死守することとし、絶対に敵の手に渡さない。各部隊は敵の上陸を阻止せよ」ということであつた。

終戦後の戦闘

八月十五日以降は、米軍の飛行機は姿を見せなくなつた。十六日になつて、今まで見たこともない水冷式エンジンのソ連機らしきものが哨戒偵察のため上空にやってきた。

十七日早朝、宿舎で砲撃音を聞いたので飛行場へ駆けつけた。滑走路の前方三千メートル位の海上にソ連の砲艦がおり、そこから占守島に向かって砲撃しているのであつた。我が高射砲隊も砲身を水平に倒して応戦していた。

その時、我が海軍航空隊の雷撃機が出撃したのである。腹部に魚雷を抱え、操縦席の天蓋を空け、日の丸の鉢巻きを締めて片手を振っている操縦士が見られた。我々は思わず手を振って答え、「頼むぞ」と叫んだ。雷撃機は少し高度を上げ、そのまま敵艦に向かって体当たりしていった。一瞬水煙が上がり、水煙がなくなつたときは、海上には破片が浮いているだけで、飛行機もソ連の砲艦もその姿は見るができなかつた。見送つた我々は

黙祷を捧げた。

この直後に情報が入り、ソ連軍が占守島の国端岬に上陸して来たことを聞いた。かねてから掘削していた洞窟に各人の装具を運んだ。洞窟の入り口にT字形になるような塹壕を掘り、ここから要撃すべく準備をし、毎日待機した。国端岬周辺では激戦が繰り広げられたようである。戦況は我が軍が有利のように伝えられたが、師団長の命令が伝えられ停戦することとなった。

武装解除と抑留生活の始まり

八月二十三日、師団長の命令で、各隊は占守島の三好野飛行場へ各人の武器弾薬その他の装具を携行して集合することになった。

占守島在住の各部隊が終結した。各隊は一列横隊となり、まず三八式歩兵銃を又銃、軍刀、銃剣、弾薬をその下に置き、「十歩後」という号令で後退し、丸腰で横隊に並んだ。

しばらくして、ソ連のトラックが無造作に我ら

が愛用した兵器を積んでいってしまった。あまりのショックに啞然としてみると、ソ連兵が来て、「アジン・ドワ・トリー……」と人数を数え、勝手に分隊を編成。元の階級の上の者に「お前は隊長だ」と指名していった。兵科も混成、元の隊の編成も崩れてしまった。長を命ぜられた者は兵の掌握、指揮に苦労をしたことであろう。私の隊は工兵隊の者もいたが、大部分は航空隊であったので助かった。

かくして、武装解除は終わり、いよいよ抑留生活の第一歩が始まったのである。

移動のハプニング

一 占守島からカムチャツカへ

昭和二十年十月中旬、ソ連兵から「ダモイ東京」と告げられた。「ああ、懐かしい故郷へ帰れる」と全員小躍りして喜び合った。

占守島北岸からソ連貨物船に乗船した。船倉に毛布を広げて雑談していると、甲板から戻ってき

た兵が、「進行方向の左岸にずっと続く陸地が見える。おかしい。ひよっとするとカムチャツカ半島と違うか」と言い出した。数人の兵も甲板に向かった。「やっぱり嘘だ。俺たちに『ダモイ東京』と嘘をついて北の方のどこかへ連れていくのだ」と口々に喋っていたが、船の中ではどうしようもない。海に飛び込んでも溺死するだけ、「なるようになれ！」と諦め、不安な一夜を明かした。

二 カリヤーキーまで徒歩五十キロメートル
翌日午後二時頃、ペトロパウロウスク上陸。

広場で小隊ごとに腰を下ろし休んだ。自動小銃を肩に掛けたソ連兵が私たちの周囲を巡回していた。ロシア語をできるのは工兵隊の塩崎曹長ただ一人。ソ連軍との話し合いに長時間かかった。

その後、大隊長から「ただいまから五十一キロメートル西方のカリヤーキー収容所へ徒歩で行くことになった。一人の落伍者もなく目的地まで行軍してもらいたい」との指示があった。

重い腰を上げて小隊ごとに発進した。銃・剣こそ持っていないが、背囊には、米・乾パン・缶詰・下着・外套・天幕・飯盒、その他、各自の私物がいっぱい詰まっており、相当の重さだった。十二キロメートル位まで歩くと、自動車整備工場付近に到着。夕闇が迫っており、その晩は露営をした。飯盒炊飯で最後の米の飯を食べた。

翌朝、再び徒歩行進が始まった。途中、小川のところで小休止。兵は皆我先にと川辺に頭を垂れ、口を水面に突っ込んで水を飲んでいった。前方に見えるのは一直線の道路、両側に白樺林があるのみ。何の変哲もない風景の中をとぼとぼと、全く惰性で足を前に出しているだけ。次第に夕闇も迫り心細い限り、誰も喋ろうともせず、遅れまいと歩くのが精いっぱいであった。極限に近い移動が続いた。

三 樺太への移動

二十年十月、ペトロパウロフスクに着くと、他の抑留者のグループも終結していた。

ソ連兵はまたしても「ダメイ東京」と言っている。兵たちは、「今度もまた、嘘と違うんじゃないか」「今度こそほんとやろ」と口々に語り合っていた。

十月中旬、ソ連貨物船に乗船。懐かしの占守島、幌筵島の山々を眺め、船はオホーツク海を西進した。二昼夜経って午後二時ごろ、船は港に停泊した。港ではC-11の日本の機関車が懐かしい汽笛を鳴らして黒煙を吐きながら動いている。どこの港だろうと甲板に集まった兵たちは眺めていた。すると、一人の兵が「ここは樺太の大泊の駅や、今は日本と違う」と大声で言った。「また、ロスケの奴、嘘つきやがった、クソー」と地団駄踏んでいる者もいた。とにかく又しても騙された訳である、今更いかんともしがたい。「ダメイ、ダメイ」の歩哨の声に追われてタラップを下りた。

四 大泊から古屯への無蓋貨物列車での移動
午後五時ごろ、大泊を発車。屋根なしなので風

が冷たく、十月の半ばというのに外套を着ても凍るように寒い。食料もなく乾パンで空腹をこまかす。暗くなつて景色も見えないところを列車は北進を続けていた。誰も話をする者もない。

夜中の十二時過ぎに、ポツリポツリと雨が当たってきた。そのうちに大粒となり、横殴りに吹き付けるようになった。外套の首筋のところから水滴が入ってきた。雨水が背中を流れるのを感じるようになり、寒くなつて震えてきた。しまいにはパンツまで濡れてきた。

朝になって駅に到着した。たくさんの兵が車両を背にして大小便をし、背囊から下着を出して交換、焚火で濡れた衣類を乾燥させていた。ソ連兵と交渉して有蓋車両に交換してもらったので、それからは少しは寒さがやわらいだ。

労役について

一 カムチャツカ カリヤーキーでの作業
主な作業は伐採であった。毎日、ラーゲリから

二キロメートルほど歩いて白樺林へ行った。そこにはソ連兵のトラクターが既に待機している。

トラクターの後部滑車から出ているワイヤーを白樺の木の根本に巻き付け、S字環をかけ、右手を挙げるとトラクターが前進して木を倒す。ワイヤーを外し、別の木の根本に巻き付ける。ソ連兵は機械のハンドル操作だけであるが、我々はトラクターのエンジンがかかっている間は動きづめに雪の中を走り回らなければならない。大変な仕事量である。ワイヤー係以外の者は、倒木の枝払いをしてから長さ四メートルに切断し、転がしていつて集積しなくてはならない。ノルマは一人当たり四・五立方メートルで、完遂しなければラーゲリに戻れない。

十一月末ともなると、積雪三十センチ位になる。朝、作業に出るときは、雪がまだサクサク凍っていて歩きやすいが、十一時頃になると融け出して軍靴に滲みてくる。作業を終わって帰る頃になると、またカチンカチンに凍ってしまう。

ラーゲリに帰ったら、足をよく揉んでからストープにあたるよう指導していたが、直接ストープのところへ素足を出して温めるため凍傷になる兵が増え、作業に出られなかったり、中には凍傷が原因で入院したり、時には経過が悪く足を切断する者もいた。

また、穴掘りの土木作業では、鶴嘴を振り下ろしても二センチ位しか穴があかず、凍土を除くに時間を要しノルマを達成できず、夜間作業をさせられる者も出た。

二 自動車整備工場での作業(ドウエナーツチ)
私の部下は航空隊の技術者がほとんどであった。そのため工場を運営しているソ連軍の要請で、私を長として技術者が選抜され、カリヤキーから移動を命ぜられた。

トラックの荷台に乗せられて移動したのであるが、私は荷台の上で兵に「向こうへ着いたら第一印象が大切、最初に与えられた仕事にはかけ声を

かけ、きびきびと精いっぱいやった振りをしよう。きつと、よい結果が出る」と話しかけたところ、全員が賛成してくれた。

夕方、現地に到着。タイヤ修理工場に宿舍を割り当てられた。装具を外してくつろいでいると、我々担当の軍曹がやってきて、「ストープ用の薪割りをしてくれ」と言ってきた。到着したばかりなのに使いぶりが荒いと思ったが、車上での申し合わせを實行しようと、私が「やろうか」と言うと、全員が「ウオー」と大声で返事をし、きびきびと動き回った。軍曹は、「ラボート、オーチンハラシヨ（大変素晴らしい動きぶりだ）」と誉めた。しばらくすると、「兵隊三人を出せ」と言ってきたので、三人の兵を同行させたところ、白パンと白米の入ったカーシャをもらってきた。据え膳で夕食にありつくことができた。担当の将校もやって来て「君たちの仕事ぶりは素晴らしい。明日からもしっかり仕事をしてほしい」と言ってくれた。車の中での作戦が図に当たったとめくばせをした。

肩擦り合うばかりの狭い部屋だったが、床張りのスチームのある部屋であった。

最初に与えられた作業は、工場増設のための敷地造成の作業であった。昨日の作戦が当たったのか歩哨も付かず、私の判断で仕事を進めさせてくれた。航空隊の兵ばかりで土木作業は全く苦手、一輪車なんか見たこともないといった兵ばかり。それでも担当軍曹が見回りに来るときは、気合いを入れてきびきびと動くので喜んで去っていった。二十一年四月、工兵隊から溶接、旋盤、鍛冶、大工など手に職を持った兵が増派された。翌日から、作業に出る前に宿舍前に全員集合させ、各特技ごとに班を編制し、各班長が人員報告した後、それぞれの持ち場に出場することとした。製材工場も開設した。自己に合った仕事ができるようになり、各兵の表情も明るくなり、楽しそうに与えられた仕事に取り組んでおり、宿舍での生活は和やかになった。

かくして、ドウエナーツチでの作業は抑留生活

三年半のうち、一番過ごしやすかったと思われた。

三 樺太 ボヘジノ（古屯）での作業

ラーゲリの門のところで二列横隊に整列。人員点呼後、二人に一丁ずつ鋸が渡された。長さ百三十センチ位の鋸の両端に直角についている取っ手を、両名が腰を下ろして交互に引っ張って白樺の木を切る作業である。

ソ連兵に連れられて白樺林へ行く。二人一組で倒木し、枝を払い、長さ四メートルに切って、丸ただけを積み上げる。夕方、ソ連兵の係が伐採した木の末口を計りに来る。合算した数字を表に当てはめると、何立方メートルできたか作業の結果が出てくる。ノルマは四・五立方メートルである。ノルマを完遂した組は作業終了、完遂しない組は残業となる。

ペアーは現場へ早く到着した者同士で組む。結局、足の早い者同士がペアーを組むことになってしまい、体力のある者となない者の差ができてしま

う。私が夜遅くに巡回していくと、体力のないペアーが月明かりの中でソロソロと鋸を動かしている。私は歩哨の兵隊に「この二人は体の調子が悪いんだ。今日はもう勘弁して帰してやってくれないか」と交渉し、帰したことが度々あった。

また、ノルマを上げるためには太い木でないといけない。細い木を切ると何本も枝を払わなくてはならないし、立方メートルも上がらない。そのことが原因で、太い木のところにペアーが固まってしまう。倒れる方向を決めるため斧で切り口を入れるのだが、倒木が隣のペアーの方へ倒れることもある。運が悪いと倒木の下敷きとなって重傷を負い、ソ連病院に入院したり、それがもとで後遺症が出たり死亡したりする者も出た。

積雪の中の作業で死に物狂いの毎日であった。私も積雪の白樺林を何キロも巡回し、クタクタになって宿舎に戻った。

四 ポロナイスク（敷香）における筏作業と海上での材木の貨物船への積載作業

宿舎の前に川があり、対岸で待機する。上流の湖で他の抑留部隊が組んだ筏を独航船が曳航してくるのを受け止めて、対岸に係留する仕事であった。

岸に打ち込んだ杭に筏のワイヤーを縛り付けるのには苦労した。水は流れているので、普通に結ぶと固く締まって筏を外すとき解けないので、工兵隊の人に教わった特殊な結び方で係留した。この結び方は復員後も随分活用させてもらった。

貨物船が河口沖に停泊すると、係留した筏を外し独航船の後方へ何連も繋ぎ、貨物船へ曳航する。貨物船まで曳航すると、独航船はロープを出して本船に固定する。そして、貨物船から下りてくるクレーンによって筏を船倉に積み込む。

次に、本船から下りてくるワイヤーを海に浮かんでいる材木に縛り付け、本船の上甲板にいる者がロープ締めした材木を引き上げる時、右手で上

下左右の指示を出しながら船倉に下ろす。船倉にいる者は、ロープを外して端からきちんと積み上げるという作業であった。

実に連繋ブレーの要る作業である。特に海が荒れている日は大変で、波に揺れる材木を海上でワイヤー掛けする作業は本当に死に物狂いである。船倉にいる者もフラフラして、まともに作業できない状態であった。

堪えられず私は「こんな荒れた日は作業ができない。怪我人が出るかもしれん。作業を中止にしてくれ」と申し出た。すると、「日本人は雨が降っても大風が吹いても戦争をしたではないか」と言っ取り合ってくれなかった。作業を終わって宿舎へ帰ると呼び出しがあつて、「プローハ、カマンジール（悪い隊長）」と言って鶏部屋のような所に入れられた。兵隊が檻の間から代わる代わる毛布とか食料を差し入れてくれ、嬉し涙がこぼれた。

日常生活について

一 ロシア語の勉強

ソ連兵と交渉するためには、どうしてもロシア語を身につけなくてはならないと痛感した。そこで、私は伐採などの作業をしなくてもよかつたので、巡回中にできるだけソ連兵に話しかけて勉強するよう努めた。単語帳を作り、それを携行して、意味がわかるとその都度記入することにした。人称・代名詞・主語・動詞・数字・日時・身の回り品など、あらゆる物の名称を手当たり次第記入して覚えた。次いで、会話体になるように、語句の配列、アクセント、イントネーションに挑戦し、話せるようになるには随分苦勞をした。一年ぐらいで何とか会話ができるようになり、引き揚げる頃には対等に会話ができるようになった。

二 気象状況

北緯五〇度以北で、カムチャツカ半島もサハリン島も東海岸を寒流が流れている。また発達した

低気圧は台風並に発達してやってくる。そのため冬季（十月から翌年五月まで）は零下四〇度位になることもあり、川は全面氷に閉ざされ、吐く息は鼻の下に氷柱となり、大便は棒状に積み上がり、夜間は腰を下げるとこれに当たり「痛い」と叫ぶ始末。これをバールで倒そうとしてもなかなか割れない。おまけに飛散した小片が衣類につき、暖まると悪臭を発する始末で苦勞した。

三 衣料について

終戦後三年半も抑留されると思っていたいなかったので、必要最小限の衣類しか携行しなかった。そのため下着はよれよれ、軍服もあちこち破れ出し、編上靴も底が薄くなり、皮革油を塗らないためひび割れが生ずる始末。戦闘帽だけは復員するまで着用していたが、他は次々とソ連軍の被服をもらって着ていた。脱帽するとソ連兵そっくりだった。それでも軍服だけは、復員するときに一着はと各自保管していた。革帯はパン欲しさにソ連兵と交

換した者がたくさんいた。

四 食糧について

ソ連軍から支給される一日の食糧は、烏麦の黒パン幅六センチ位、アフシヤンカという粉、乾燥鯿、塩鮭、砂糖位で、皆空腹を訴えていた。

ソ連ではすべてノルマで左右される。一〇〇%で普通、七五%のときは二五%カットされる。野菜などのビタミンがとれない。炊事係がソ連兵のキャベツ畑へ行き、ソ連兵が上部のキャベツを刈り取って残った堅い茎を斧で切ってきて、ドラム缶で長時間煮てお粥のようにして食べた事もあった。ある時は積雪を掘って、ツンドラの苔をとって搾って食べたこともあった。ソ連兵は野犬や鳥を見つけると平気で銃で撃っていた。我々は、その死骸を集めてきて喜んで食べたものだった。また、支給になった砂糖を貯めておいて、作業のない日に汁粉にして食べるのが楽しみだった。

五 住まいについて

○占守島

武装解除を受けた後は、元の兵舎へ戻ることができず、海軍の兵舎に入った。

地面を掘り側壁を柱と板で囲み、三角屋根を置いた建物で、比較的快適であった。

○カムチャツカ カリヤーキー

ペトロパウロフスクから徒歩で五〇キロ行軍してきて、休む間もなく一個分隊ごとに各人携行の天幕を組み合わせてテントを張った。牧草の敷藁の上で寝ることになった。

○ドゥエナーツチ自動車工場

ここでは、前掲のように建物があてがわれ、居住環境としては何の不自由も感じなかった。

○ボヘジノ（古屯）

ここでも天幕生活であった。ラーゲリの中で分隊ごとに天幕を張るのであるが、天幕の広さに、深さ五〇センチ位の穴を掘り、その中へ天幕を建てる。穴を掘った土を天幕の周りに積み上げて固

める。下に牧草を敷き、薪ストーブを焚くと結構暖かかった。しかし、燃料の薪があるので、薪作りと不寝番を一人用意しなければならなかった。

○ポロナイスク（敷香）

終戦後、居住者はどこへ行ったかわからないが、日本人の居住していたと思われる民家が三軒あり、これを利用した。久しぶりに日本の建物ということで、懐かしかった。居住性については特に困ることはなく、広いので今まで交わせなかった会話もはずんだ。

六 医療について

抑留者の中には、衛生兵はいたが軍医はいなかった。作業に出る出ないはソ連軍の軍医の判断である。軍医に「大丈夫」と言われたらどうしても作業に引っぱり出された。一番困るのは年老いた召集兵で、神経痛で脚、腰が痛いと言っても「ソ連には神経痛という病気はない。ラボート（仕事）!!」と言って、作業に出なくてよいと診断してく

れない。これにはいくら説明しても無駄で、痛みをこらえて作業に出た兵もたくさんいて気の毒だった。

七 虱対策

天幕の中で、夜中に背中を起こして前屈みになり、シャツの継ぎ目を探っている。虱潰しである。尻尾の三角になった虫が赤くなつてうごめいている。背中がむずむずと痒いと思えば虱である。診断で虱の噛んだ跡をソ連兵に発見されると、全員ドラム缶で下着の煮沸命令が出された。

八 ソ連の病院への入院と病死者

ソ連軍軍医に入院の診断を受けると、トラックでソ連の病院に入院させられる。医療行為についてはわからないが、元気になって帰って来る者より、死亡して屍をトラックで運んで来る方が多い。ある日、指揮班の幕舎の前にトラックが停まった。道路に出て見ると、ソ連兵二人がトラックの荷台

の上で頭部と両足を持って屍を地上に放り投げ、
「ボーマル(死亡)」と言って走り去ってしまった。
私は休業者を集めて天幕を張らせ、屍を安置した。
作業終了で隊員が帰るのを待って全員を集合させ
た。同僚の中には僧侶もおり(数珠を持っていた)
念仏を唱えてもらい、穴を掘って樺の枝を燃やして
荼毘に付し、遺骨の骨片を大工に作らせた小箱
に入れ、出身地近くの戦友に託した。こういう事
が数回起こっていた。

九 ソ連兵の状況

○上官の命令はスターリンの命令

ソ連兵には、この言葉が絶対というほど徹底し
ていた。「スターリン、プリカザールイフシヨウ」

作業、生活などでソ連兵に改善を求めてもこの
言葉が絶対で、全然考慮してくれなかった。

○教育程度

将校でもあまり賢くなかったのではないかと思
われた。人員点検の際、三列に並ばせ(日本は二

列横隊だが)、右端から一、二、三と数えていく。
最後が三人ならよいが、欠けている(一人か二人)
ときは数えられない。地面に靴で何やら書いて、
「ネプライノ(不詳)」と首を振って点呼のやり直
しをしていた。

○物々交換

ソ連兵の持つ腕時計は直径六、七センチの大型。
日本兵は小型の時計を持っているので、白パンと
交換しないかと言われて交換した者が多数いた。
皮バンドも先に述べたように交換させられていた。

○対日本人感情

すべて命令だ、ノルマだと強圧的に圧力をかけ
厳しく当たる兵が多かったが、中には、お人好し
のように親しくしてくる者もいる。作業中、私は
仕事をしなかつたので歩哨とよく話をした。ロシ
ア語もぼつりぼつり喋れるようになり冗談も交わ
したりした。「共産主義はいやだ。日本へ君たちと
行きたい」と言う兵もいた。

当時はソビエト連邦だったので異人種の混成だ

つたためと思われ、全部が共産主義でもなかったようである。

抑留生活中の印象に残ったでき事

一 ソ連内務省（MVD）のスパイ誓約

カムチャツカの自動車整備工場にいた時、ソ連軍の命令で、日本兵の動静についてスパイすることを命ぜられた。

工場巡回中、白い縁の軍帽を被ったソ連軍将校が近寄ってきて「川邊さん、こんにちは。私と一緒に来て下さい」と日本語で話しかけてきて、進行方向を指さした。ソ連将校集会所の方向である。到着すると、鍵で扉を開け「イジ、スター（こへお入り）」と言った。更に奥に入って、もう一度鍵のかかった部屋に誘導された。

そこには将校が四人いた。机の上には拳銃が置いてあった。椅子に腰を下ろすように指示され腰を掛けた。正面に座った将校が、ロシア語で紙に書いた文章を読んだ。すると、私を連れてきた将

校が、

「私が通訳するからよく聞いて下さい」

と日本語で私に言った。

『誓約書。私はソ連軍に忠誠を誓いますとともに、指示されたことは堅く守ります。もしこれに違反したときは、どんな処分を受けてもかまいません』以上の事がこの文章に書かれています』と通訳をした。そして、「この文章の一番下にあなとのサインをしなさい」と言われた。

私は突然のことに判断に苦しんだ。サインしなければどうなるかわからない。サインすれば、日本人が日本人を売る羽目になるのは歴然、スパイとなれば日本へ帰れるかどうかわからない。しばし唾を飲んで思案した挙げ句、どうにでもなれという気持ちでサインをした。すると、

「ありがとうございます。それでは宿題を出します。あなたの部下で、憲兵隊、補助憲兵、警察官であった者の住所、氏名、年齢、階級を調査して私に報告して下さい」

と私を連れてきた政治部将校が伝えた。かくして正式にスパイ任命が行われ、スパイ行動に着手しなければならなくなった。報告もさることながら、今後の自分がどうなるか心配で夜も眠れなかった。

回答については、次のように報告した。

「我々の部隊は航空隊であり、技術者ばかりである。元工員がほとんどで、憲兵、警察関係の者は一人もいない」と。

その後、権太に入り大泊港で、あの時私を誘導した政治部将校に会い、挨拶はしたが、その後スパイ関係の要求はなく安心だった。

二 古屯でのソ連軍大隊長への直訴

古屯での収容所生活について、次のような苦情が私の耳に入ってきた。

・作業に出て不在中に持ち物がなくなる。作業を休んで幕舎にいる兵が、二度も三度も何かを物色しているソ連兵を目撃している。

・夜間、歩哨の宿舎で酒を飲み、アコーディオンを鳴らし、大声で唄い、時には女性のはしゃぐ声も聞こえ、喧しくて寝られない。

・日本兵が夜間幕舎の傍で立ち小便をすると、すぐに歩哨宿舎近くの透き間だらけの部屋に連行して朝まで閉じ込める。

以上のような行為が頻繁に行われ、翌日の作業も頑張れないという不満の声が伝えられた。このまま放置できないので、私はソ連大隊長に直訴する決意をした。

そこで翌朝、作業出発前に全員が集合している前で私は、

「歩哨の我々に対する目に余る行動は、私も十分承知している。私は今からソ連軍の大隊長のところへ直訴に行く。捕虜の分際で生意気だと言っで殺されるかも知れない。その時は、〇〇曹長が指揮を執ってもらいたい」と指示した。涙を流している兵もいた。

私はソ連軍大隊本部へ単身乗り込んだ。そして

大隊長に面接を申し入れた。

大隊長は面接を許可して、入室を許された。大隊長の机の前で直立不動の姿勢で、前記の歩哨の行為、態度について申し出た。そして

「我々が日本へ帰してもらったとき、そんな話をしたら、ソ連の風格も廃り、値打ちも下がるのではないか」と話した。大隊長はしばらく考えていたが、

「そんなことがあったのか。あなたの言う通りだ。早速、その歩哨を交代させる。そして安心して生活ができるようにする。その代わり作業も頑張るしてほしい」

と答えてくれた。私は、大隊長がよくも理解してくれたものだ、実に立派な大隊長だと感激し、その場に座り込んでしまう位嬉しかった。

翌日、歩哨は全員交代し、新しいメンバーとなり、私たちに對する処遇は一変し、温かみのある待遇となり、作業に励むことができるようになった。

二 民主化運動と日本新聞

ソ連兵から日本新聞が送られてきて、収容所へ配られた。その内容を見ると、天皇制反対、共産主義万歳と大文字で書かれており、そのような記事が掲載されている。日本へ帰ったら共産党に入党を勧める文章が載っていた。シベリアの抑留者は、民主化と言って旧軍隊の組織を解散し、指揮者は立候補した者の中から選ばれ運営されているなどの記事も出ていた。

私は全員を集め、その前で次のように話した。
「配られた日本新聞によると、民主化と称して、旧軍隊の階級をなくして、選挙された者が全体を統制していく制度に改革している部隊があるようだが、今まで我々は現体制で全員一致協力で頑張ってきた、特に問題は起きなかった。あとしばらくで復員できると思う。私としては現体制のままですべてやっていきたいがどうか」

と呼びかけた。
「私の意見に賛成の者は手を挙げてほしい」

と言ったところ、全員挙手してくれた。このように、日本新聞に惑わされることなく、復員まで旧軍の体制を維持することができたのである。

三 復員 真岡から函館へ

ポロナイスク（敷香）における作業が終わり、トラックに乗車した。車はユージノサハリンスク（豊原）経由で西の方に向かって進行していた。口々に、今度はどこで、どんな仕事をさせられるんだらうかと話し合っていた。

夕方、我々の車は停車した。車の近くには日本兵が沢山自由に歩いていた。その兵隊から、

「ご苦労さんやったなあ。ここは真岡、もうすぐ帰れるぞ」

と大声で呼びかけてきた。夢ではないかと我が心を疑った。

車を降りて倉庫のような建物に入った。他の部隊の兵もたくさんいた。我々の部隊の起居する場所も決まり、各人は旅装を解いて、夕食を食べ、

早々と眠りについた。

翌日になって、復員時の軍服や編上靴が交付された。各地からも他の部隊が集まってきた。待機すること二日、真岡港に長い間夢にも見た日の丸をつけた復員船高砂丸が接岸した。

十二月三日、我々は待望の船上の人となった。

マイク放送があり、

「日本人の兵隊さん、長い間、本当にご苦労さまでした。私たちは皆様をお迎えに参りました。

この船には、ソ連人は一人も乗っていません。ご安心下さい。今までのことを忘れて、ゆっくりくつろいで下さい」

と挨拶があつた。ホッとして胸をなでおろし、肩を抱き合つて喜び合つた。

一夜明けて、高砂丸は、夢にも見た日本本土、函館港に入港したのであつた。

私にとって抑留生活とは

一 良かったこと

(イ) 精神的に強くなった。持久力、忍耐力、指導性が身についた。

(ロ) ロシア語の独学習得により、努力すればどんなことでも身につけることができることが理解できた。

(ハ) 工兵隊と共同作業したことで、建築のことや梱包の仕方、紐の特種な結び方などを覚えることができ、復員後の生活で非常に役に立った。

二 辛かったこと

(イ) 多くの戦友を作業や病気で亡くしたことは、本当に残念であった。

(ロ) 復員まで三年半に亘るブランクにより、価値観を変えるのに暇がかかった。

(ハ) 抑留中に両親、我が子の死にも会えず、両親の死後、妻が弟妹四人の生活を支えてくれ、終戦後の苦難の途を歩ませた。

(ニ) 復員後の十二月末、米軍CIAに呼び出さ

れ、ソ連の情報の質問を受けるため東京市内でいろいろ聴取された。前に書いたソ連軍と誓約したことと合わせ、二重スパイをしたことになり、五年位は誰に話をするともなく、胸に包んで心配していた。五年程して何事もなかったのでやっと安心できた。

おわりに

太平洋戦争に始まり、抑留生活を終えるまでのでき事を縷々綴ってきたが、もう六十年も昔のことになる。本当に激動の十年間であった。七十歳前半以上の人でないとなかなかこのように話解できないと思う。それ以下の方々に私達の抑留生活の労苦を語り継ぐことよって、あの忌まわしい戦争を二度と起こさないことを願うとともに、現在イラクの問題が複雑化しつつある今日、戦争に関係のない平和な日が巡ってくることを念願してやまないものである。

【執筆者の紹介】

大正六年九月二十八日 出生

出生地 松阪市中町

現住所 三重県津市桜田町

家族構成 終戦時 妻・長女・父・母・弟二人・

妹二人

経歴

昭和五年三月 三重県師範学校附属小学校卒業

昭和十年三月 (旧) 三重県立津中学校卒業

昭和十年五月 日本国有鉄道の採用試験に合格し、

大阪鉄道局管内の四カ所の駅で勤

務

昭和十三年一月 歩兵第三十二連隊に

入隊(久居市)。

(軍歴・
抑留歴省略)

昭和二十三年十二月 小樽上陸、復員

昭和二十四年一月 妻の兄と共同で製菓業

昭和二十八年九月 国家公務員試験合格、津少年

鑑別所勤務拝命

昭和五十三年三月 同右停年退職

昭和五十三年四月 法務省津保護観察所保護司委

嘱

津市教育委員会青少年室相談

員

津警察署少年警察協助力委嘱

昭和五十九年四月 桜田町自治会長(二年間)

平成七年三月 満八十歳となり、すべての要職を

離れる

現在の動向(八十六歳)

現住所にて、詩吟(岳風会奥伝)・水墨画・水彩

画を楽しんでおられます。なお、全国強制抑留者

協会三重県支部の役員として活躍されております。

(三重県 宇平 博)